

## 【書 評】

### 福盛貴弘(2010)『基礎からの日本語音声学』東京：東京堂 出版、269pp.

岡田 あずさ<sup>†</sup>

実に読みやすいというのが、本書を手にとったときの印象である。書名に「基礎から」とある通り、日本語音声学概説書の中でも群を抜いてとっつきやすい。まさに、これから日本語音声学を学びたい人にぴったりの入門書である。

日本語音声学について基礎から分かりやすく解説がなされているのは言うまでもないが、早口言葉が言いにくい訳や日本語の文字による表記に関する話など、日本語母語話者であれば内省可能な例がふんだんに盛り込まれており、音声学の知識がなくても本書の内容を十分理解することができるだろう。専門的な内容についても必要に応じて触れられており、音声学について多少知識がある者が読んでも物足りなさを感じることはない。「母音」「子音」などの名称の由来や我が国における調音音声学の歴史に関する記述は大変興味深い。パンダやりんごは何拍かという問題も考えさせられる。ちなみに、4歳の息子に同様の課題をさせたことがあったが同じようなモーラ構造を持つ場合であっても単語によって2拍~3拍の揺れがあり、どちらとは言い切れなかった記憶がある。なお、本書で触れられている1拍というのは確認できなかった。

このように本書は盛りだくさんな内容だが、読者を飽きさせないような工夫も随所に盛り込まれている。各章の導入部分では、音声学を専門としない人や初学者たちが登場して音声に関することがらについて自由な発想と鋭い感性で「なぜ？」と素朴な問いかけを行い、その問いに「博士」が答えていく（しかも、これらの会話は実話がもとになっているというから面白い）。音声学や音声に関心を持って学んでいる学生が出くわすだろう疑問や具体的な問題を取り上げ、それを話の切り口として説明が展開されるので、同様の環境に身を置く読者にとってはこれ以上分かりやすいことはない。また、これから音声学を学ぼうとする学生や語学教育に携わろうとする教員志望の若い読者にとっても、身近な話題に関する親しみやすい会話を通して日本語の音声について考えることができる。

内容のわかりやすさや斬新な切り口などと並ぶ本書のもう1つの特徴は、独特の語り口である。平易な文章で書かれているだけでなく、まるで著者の講義を聞いているかのような親しみやすさを感じる。また、音声学における基本的な考え方が一貫して示されており、読者が音声学に関する正しい知識や基本的姿勢を自然に身につけられるよう導いてくれる。はじめに結論ありきではなく、生のデータに1つ1つあたっていくことの必要性や、実際の音声聞いて自分の目で確認しなくては身につかないことが多いということ、また、はっきりと分かっていないことに対してはまだ解き明かされていないことを認めることの重要性などが繰り返し述べられている。サウンドスペクトログラムなどを確認しながら、実験音声学をはじめとする実証的な研究成果に基づいてなされるてい

<sup>†</sup> 広島修道大学

ねいな解説には説得力がある。音響音声学や音声解析に関心がある人はぜひ読んでもらいたい。

「手っ取り早く」音声学の知識を詰め込もうと、この本を手にとって読み始めた人が、読み終わる頃には「手っ取り早く」音声学を理解することは不可能であることを実感させられる良書である。そして、私たちが普段あまり意識せずに聞いたり話したりしている音声に改めて興味深いものであったことに気付かせ、音声学の面白さを再認識させてくれる一冊である。